

古事記に学ぶ その 28

殺したり殺されたりの世の中で・・・

<1> 安康天皇の船出とその終焉

穴穂命(あなほのみこと)が石上(いそのかみ)に穴穂の宮を造って、20代安康(あんこう)天皇と名乗り國を治めた。この天皇は、弟の大長谷命(おおはつせのみこと)のために、坂本の臣などの祖先である●根の臣(ねのおみ)を使者として、大日下王(おおくさかのみこ)に送り込んだ。

「貴殿の妹である若日下王(わかくさかのみこ)を大長谷命(おおはつせのみこと)の妻として迎えた
いので、よろしく」

＊閑話休題(登場人物の人間関係を復習)

安康天皇=19代允恭天皇と忍坂之中津比売命の間に生まれた御子(古事記に学ぶ その 27)

大長谷命=19代允恭天皇の御子(同上)・安康天皇の弟(古事記に学ぶ その 27)

大日下王=16代仁徳天皇と髪長比売の間に生まれた波多毘能大郎子(はたびのおおいらつこ)

別名を大日下王と言った。(古事記に学ぶ その 24)

若日下王=16代仁徳天皇と髪長比売の間に生まれた波多毘能若郎女(はたびのわきいらつめ)

別名を若日下部王・若日下王と言った。(古事記に学ぶ その 24)

根の臣=安康天皇の使者として送り込まれたが、実はこの男は・・・

穴穂の宮=現在は穴穂神社(JR 桜井線天理駅の南方) <https://yahoo.jp/RVfETG>

大日下王は喜んで、この話を受け、返礼として結納の品を使者である根の臣に託した。ところが根の臣は、結納の品として預かった玉鬘(たまかづら)を盗み取り、しかも

「大日下王は天皇からの求めなど受けられるものか、と怒って太刀を握りしめておりました」と天皇に虚偽の報告をした。天皇は讒言に乗ってしまい、激怒して、大日下王を殺してしまった上に、

大日下王の後である長田大郎女(ながたのおおいらつめ)を奪って、自分の大后に据えてしまった。

長田大郎女は、19代允恭天皇と忍坂之中津比売命の間に生まれた御子で、安康天皇から見れば実の姉である。

こんな出来事があった後の話になるが、大后が7歳になった前夫(大日下王)の子●目弱王(まよわのみこ)が神殿の下で一人遊びするのを見ている時のこと。天皇は(そばに子が居るのに気がつかずに)「目弱王がやがて大人になって、自分の親を殺した犯人が私だと知ったら、復讐心に燃えて心変わりするだろうか?」と大后に語りかけた。一人遊びをしていた目弱王はこの言葉を聞いてしまった。天皇が寝てしまうのを待って、太刀を取り出して天皇の首に切りつけて、大臣の●都夫良意富美(つぶらおおみ)の家に逃げ込んだ。

安康天皇の御世はかくして終わりになった。天皇の御年は56歳、陵は菅原の伏見の岡に造られた。

安康天皇陵 <https://yahoo.jp/orJU9>

<2> 安康天皇亡きあとは如何に・・・

天皇の弟である大長谷命(おおはつせのみこと)はこの時まだ15歳だった。兄の境之黒日子王(さかいのくろひこのみこ)に、天皇が殺されたことを報告して、「この先如何なされるか?」と尋ねた。

境之黒日子王はこれを聞いて驚きもせず、安閑としていた。

大長谷命は、天下の一大事しかも我が身内の大事件にも関わらず安閑としている兄境之黒日子王に立腹して、切り殺してしまった。

次に、もうひとりの兄である八瓜白日子王（やつりのしろひこのみこ）にも同じことを問いかけたが、反応は同じだった。立腹した大長谷命は、兄の襟首をつかんで引きずって、小治田（おわりだ）まで行き、穴を掘って、生き埋めにした。腰まで埋まったところで、八瓜白日子王は両方の目玉が飛び出して死んでしまった。

大長谷命は兵を集めて、目弱王が逃げ込んだ都夫良意富美（つぶらおおみ）の家を取り囲み一戦を交えた。（補足：大長谷命は、これまでに都夫良意富美の娘 訶良比売と婚約関係にあったらしい）

「私が予て言い交した乙女はここにいるのか？」と声高に問いかけると、都夫良意富美が武器を捨てて出てきてこう答えた。「娘の●訶良比売（からひめ）はお召しに従ってさしあげましょう。五箇所の屯宅（みやけ）も添えて献上いたします」

やがて矢種も尽きてしまい、都夫良意富美は「もはやこれまで、私を殺してくれ」という目弱王を殺して、自分も首を切って自害した。

<3> もうひとつの殺人事件

この事件ののちのこと、淡海の佐佐紀の山の君の祖先●韓倭（からふくろ）という者が大長谷命にこう言った。「淡海の久多綿（くたわた）の蚊屋野には鹿などの狩の対象になる獣が沢山いますよ」

大長谷命は、いとこの市辺之忍齒命（いちのべのおしはのみこと）を誘って蚊屋野へ出かけ、仮御殿を建てて一泊した。翌朝、日の出前に市辺之忍齒命は、仕度を整えて馬に乗って大長谷命の御殿の側まで来てお付きのものに「夜が明けたので早く行きましょう」と声をかけた。

市辺之忍齒命（いちのべのおしはのみこと）は、雄略天皇（大長谷命）から見ると、父（允恭天皇）の四人兄弟の長兄（履中天皇）の長男である。（系図参照）

側近の者は大長谷命に、讒言を交えて「身を固めて、気を付ける方が良い」と伝えた。

大長谷命は衣の下に鎧を着こんで、弓矢を整えて先行する市辺之忍齒命の後を追った。

そして追いつくや否や、市辺之忍齒命を矢で射落とした上で切り殺してしまい、死体を飼葉桶に入れて地中に埋めてしまった。

市辺之忍齒命の御子●意富祁王（おおけのみこ）と●袁祁王（をけのみこ）はまだ少年だった。二人は身の危険を感じて山城へ逃れ、玖須婆河を渡って針間の國に入り●志自牟（しじむ）の家に行き賤しい牛飼いや馬飼いに身をやつして、使用人としてそこに住みついた。

<3> 允恭天皇の御子たちの生涯

20代安康天皇を中心に様々な血なまぐさい事件が続発した。父（19代允恭天皇）の代から様々な事件が起きて混乱して来たので、允恭天皇と忍坂之大中津比売命（おさかのおおなかつひめのみこと）とのあいだに生まれた9人の御子がどんな人生を辿ったのかを簡単に整理し、系図の中に殺人事件に発展したものを書き加えてみた。

橘大郎女（第八子）と酒見郎女（第九子）については、古事記にまだ名前しか登場していないので、詳細はわからず、またこの時点では21代雄略天皇の行く末も語られていないのでわからない。

21代雄略天皇（大長谷命）の系図については次章（古事記に学ぶ その29）で触れることにする。

○第一子（木梨輕王）：父の死後20代天皇になる筈だったが、喪中に妹（輕大郎女）と関係を持ち失脚。伊余に流罪。のちに伊余で心中。

○第二子（長田大郎女）：仁徳天皇の御子大日下王の後になった。大日下王は、根の臣の悪事と讒言

によって安康天皇(弟)に殺され、安康天皇の後にされた。

○第三子(境之黒日子王):安康天皇が殺されたあと、何ら行動を起こさなかったことから弟(大長谷命)の怒りを買ひ、切り殺された。

○第四子(穴穂命):**20代安康天皇**になった。根の臣の悪事と讒言に乗って大日下王を殺し、大日下王の後(実は自分の姉)を手に入れたが、遺児目弱王(7歳)に殺された。(56歳)

○第五子(**軽太郎女**):父の喪中に兄(木梨軽王)と関係を持ち、兄は流罪。後を追って流罪先に逃避したが、のちに心中。

○第六子(八瓜白日子王):安康天皇が殺されたあと、何ら行動を起こさなかったことから弟(大長谷命)の怒りを買ひ、生き埋めにされて殺された。

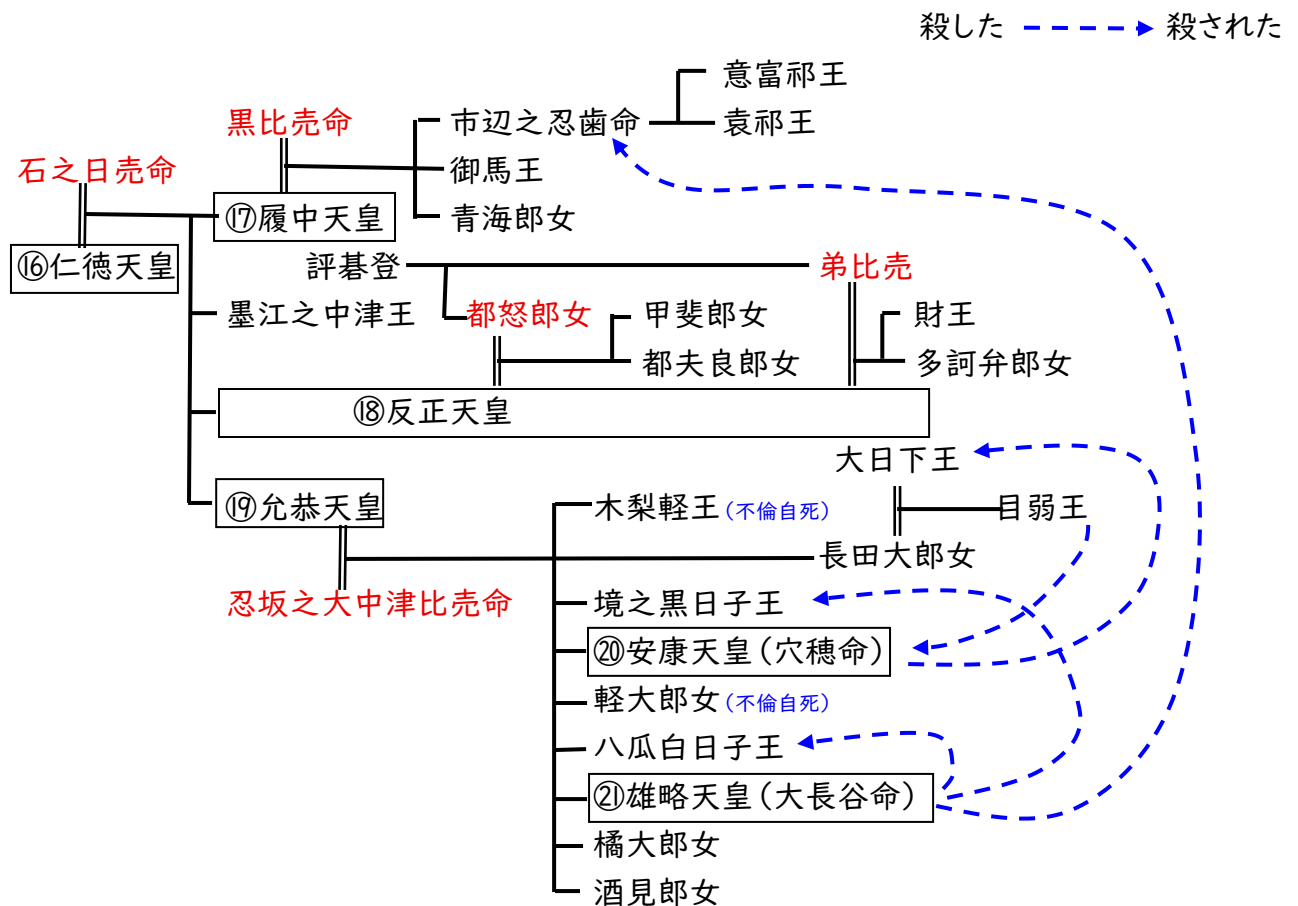
○第七子(大長谷命):20代安康天皇が殺された後、持病を理由に後継を拒んだが、周囲の説得で渋々皇位を受けた。新羅から来た医薬の権威の調剤により病は完治した。

一族の有事に何も行動を起こさない兄たちを次々に殺して、**21代雄略天皇**になった。

○第八子(**橘太郎女**):

○第九子(**酒見郎女**):

天皇の系図(19代~21代)と殺し合いの図



以上